地質ニュース 433号，51-54頁，1990年9月
Chishitsu News no. 433, p. 51-54, September, 1990

日本人の英語

河 内 洋 佑[1)]

IGC の日本開催を待つまでもなく，海外との交流や，海外の学会等での日本人の口頭発表が近年大いに増加してきている．このような場合，ほとんどの使用言語は英語であり，いまや英語が地質学を含む自然科学分野での lingua franca になったことは否定できない．しかし学会等に出てみて日本人の話す英語，日本人の発表のしかた，にいつも気になる誤りや改善すべき点があって，もどかしい思いを抱くことが多かった．私はもとよりこの方面の専門家ではないし，優れた参考書もたくさん出ていることであるから，一般的な問題についてはそういうものを参考にしていただくことにして，直接私の見聞きした例を主にあげて御参考に供したい．何かの役に立てていただければ幸いである．なおこの小文を記すに当っては，何度も来日し日本人に友人も多いオタゴ大学の C. A. ランディス氏ほかの意見も参考にした．

発音について

まずよく聞く誤りはマグマ溜りを「マグマ・リザーバー」(アクセントのあるところをアンダーラインで示す) と呼ぶ人がかなりあることである．マグマ溜りは magma reservoir であって magma reserver ではないのだから，発音はマグマ・リザヴォアでなければならない．火成岩成因論の一番基本的な言葉を全く間違って発音されると，それだけでも話の内容が怪しいような気がしてくることは事実である．また basin をベーズンと濁って発音することもいささか気になる．英語の地質学用語の一部には発音が確定していないものがあることは確かで，亡くなったオークランド大学のR. N. ブラザース教授は basalt をバザルトといっていた．(私の知っている限りの native speakers はこれはおかしいと言っていたが，それでも通用はしていた.) Basin や basalt は普通ベースン，バソールトと発音される．キロメートルもキロミターかキロミーターか，英語圏の人間の間でも議論がある．一説によれば，メートル法の距離・面積・体積などに関係した言葉については前にアクセントがあり (キロミター，ミリミター，センチメター)，これらを測定する機械等に関係した言葉では後にアクセントを置くと言われる (バロミター，スピドーミター，サモミター．ただし反論もあり，アメリカ英語とイギリス英語の間の違いもからんでなかなか決着がついていない)．地質学上の術語については AGI の Glossary of Geology (第3版) に“標準的”発音が示されているので，疑わしい場合は参考にするとよいであろう．例えば Pangaea は英語読みではパンゲアではなくパンジアである (Pa の音に注意．これは日本語のパではない)．ただし以上のような例では，日本人の発音が少しおかしくても英語国人にとって理解はそんなに困難ではない．

英語国人にとって日本人の英語を分りにくくしている最大の原因の一つは，変なところに母音を入れるという日本人の癖であるそうである．例えば，calcic を calucic と発音されると何を言っているのか全く分らなくなることもあるそうである．

また逆にローマ字綴りでは母音が入っているのに，日本人の日常の用法として母音を全く落したり，非常に弱く発音するような場合も，極めて理解困難を来たす．例えば四国を日本人は普通途中の i と最後の u を落して Shkok と発音している．外国人にとってこれは Shikoku と全く異なる地名のように響くのである．日本語の「し」では i，「く」や「す」はほとんどの場合 u を落して発音されるので，せっかく日本の地質を勉強してきた人に誤解されないためには，母音をことさら強調するような発音を心がける必要があるのではあるまいか．秩父も日本人は Chichib に近く発音している．訓令式で綴られた Titibu が日本人の言う Chichib と同じ地名のことであるとは，日本に初めて来た普通の外国人にはすぐには分らないであろう．故藤本治義教授は時期によって Fujimoto と Huzimoto という二つの綴りを使っておられた．これは日本語を知らない外国人には全く違う人物ととられてしまう．日本語のフは，英語のFの音に極めて近いが，food と hood，fork と hawk などの発音は

1) ニュージーランド オタゴ大学：Geology Department, University of Otago, P. O. Box 56, Dunedin, New Zealand.

キーワード：英語，発音，和製英語

ちゃんと区別することが大切であろう．同様な問題は鼻にかかるガ行音（発音通りに綴ればnga, ngi, ngu などとなるべき音）にもある．例えば大台が原はローマ字綴りでは Odaigahara であろうが，実際の発音は Odaingahara である．これでは全く違う場所ととられかねない．また外国人にとってリャ，リュ，リョ系の音を rya，ryu，ryo 等の綴りから想像することは，日本語を習っていない限り不可能であろう．英語圏の外国人なら領家をライオーケと発音することは先ず間違いないところである．（普通彼等はリョーケという発音はできない．）

日本語では母音の数が英語に比べて少ないので，bug も bag もカタカナで書くとバッグとなってしまい，とかく同じようにと発音される傾向がある．もちろん bag と bug は英語圏の人にとっては全く異なる発音であるから，正しく発音するように心がけないと，とんでもないことになる可能性もあるわけである．同じような例としては staff と stuff などがある．

また日本人にとって発音の区別が困難な音として古典的なのはLとRである．LとRは英語では全く違う音として認識されていることは頭では分っていても，実際の場面では困ることが多いのではないかと予想される．Palagonite と paragonite は両方が一緒にでてくることはあまりないだろうが，日本人にとっては発音も聞取りも困難である．Lの発音には dark L と clear L とがあるが，前者はウに近く発音され，日本人にとって発音しやすい（例 milk）．後者のLには live，lake などが例としてあげられるが，明音という訳語にもかかわらず日本人にとっては全く明瞭でもなんでもない頭の痛い発音である．なかでも slate などの発音には私も何時も苦労している．誤解を避けるためには，もしそれがキーワードならスライドなどに示して，Rのように聞こえるかもしれないが実はL（あるいはその逆）であることをはっきり聴衆に示しておくようにしたらよいと思われる．太田良平氏の著書「応用地質英語」には注意すべき発音についての例がもっと載っているので興味のある方は参照されるとよいであろう．

ランディス氏は日本人の英語が理解しにくい原因のもう一つに，単語やセンテンスを切るべきところで切らなかったり，切ってはならぬところで切ったりすることをあげている．一つ一つの単語のアクセントが正しいとしても，文章のイントネーションがおかしかったり，「弁慶がな，ぎなたを持って……」式で読まれては，分かるものも分からなくなるというものである．日本の英語教育では単語の発音については教えるとしても，文章の流れに沿った読み方までは教えていないようであるので，英語国人の先生につくなり，演劇や映画を見るなり，国際会議にたくさん出るなりして場数を踏んで慣れるしかこの問題解消の方法はないのではないかと思われる．

学名のラテン語の発音については，R. W. Brown (Composition of Scientific Words. Smithonian Institution Press. 882p. 1975) によると，「古典ラテン語がどのように発音されたのかは誰も知っていない．しかし言葉の目的はコミュニケーションにあるのだから語源をはっきり示すように発音すべきである．その限りでは英語圏の学者は英語風に発音して一向かまわない」と言っている．（つまりでたらめのところで切って発音してはならないということ）．普通の日本人にとっては，LやRの区別はもちろん他の発音のかなりについても発音区別が困難なのであるから，Brown の言うところに出来る限り従って最善をつくすしか方法はないのではないかと思われる．

固有名詞の読み方

固有名詞は人や場所によって読み方が異なることがあるので必ずしもこうだと断定できない．例えばニュージーランドの前首相のロンギ氏は Lange という綴りであるが，普通ならこれはランジと読むところである．難しいと思われる固有名詞の読み方の例を以下に示す．

Ardnamurchan（地名）はアルドナムルハンではなくアードゥナマーケン．
Buchan（地名）はブーチャンではなくバッケン．
Chisholm（人名）はチスホルムではなくチズム．
Cholmondeley（人名）はチョルモンデリーではなくチャムリー．
Durham（地名）はダーハムではなくダラム．
Jacob（人名）はヤコブではなくジェイコブ．
Michael（人名）はミハエルやミカエルではなくマイケル．
Norwich（地・人名）はノーウイッチではなくノーリッチ．
Stephen（人名）はステフェンではなくスティーブン．
Warwick（地・人名）はワーウィックではなくワーリック．

和製英語の問題

別の問題として和製英語がある．和製英語はもちろん英語圏の人には通じない英語である．しかし和製であることを意識していないと困ることがあるかもしれない．そのうち私の気のついたことを二三記してみよう．その一つはリストアップという言葉である．動詞としてのリストは他動詞であるから直接目的語をとり，アップなどという余計なものはいらない．つまりリストするだけでよいのである．またドッキングという言葉は日本では結

合するという意味に使われている．しかも，もともとドッキングとは「桟橋につける」とか「ドック入りする」という意味であり，結合するという意味は全くなかった．宇宙船の場合も「母船に入る」わけであるから，もともとのドッキングの意味の範囲に入っている．英語のドッキングにはまた「動物の尻尾を切る」という意味もあり，この意味では日本での誤用といわば反対の意味あいになるわけである．現在英語圏のごく一部では，宇宙船のドッキングの意味の誤解から，日本でと同様に「結合する」という意味での使用が広まりつつあるといわれる．しかし，まだ最新の新語辞典でもこの用法は取上げられていないから，日本人としてはドッキングを結合するという意味で使用するのは避けたほうがよいと思われる．和製英語は日本中どこへ行っても氾濫していて，知らず知らずのうちに英語だと思い込んでしまう危険が大きい．地質学上の言葉ではないが，商品名などには傑作が多い．中でも最大の傑作はポカリ・スエットという飲料のネーミングである．Sweat という言葉は最近まで女性や上品な人は使用を避け，代わりに perspiration という言葉を使っていたぐらいで，いやな臭いや，不潔な感じを連想させるものである．日本語で言ったらポカリ・スエットという名前は，果汁ならぬ汗汁という意味の命名で，飲料としては全く不適当である．念の入ったことに容器には英語でも商品名が印刷されている．

退官や還暦記念論文集での Memorial volume（亡くなった人の場合のみに使われる言葉）というタイトルの使用は，最近ではなくなったようで大変おめでたいことである．

とにかく和製英語の例は枚挙にいとまがないくらいで，街を歩くとき見る看板，広告，雑誌名，商品名など，意味のわからないもの，思わずふき出してしまうもの，顔をしかめるものがすこぶる多い．私は常づね何故これらに日本語を日本語のまま使わないのか，あるいはせめてカタカナのままでいけないのか，何故デタラメな英語を添えなければならないのか不思議に思っている．

話題は多少変わるが「I am going to swim on foot」（私は歩いて泳ぎに行くところですという作文のつもり）は英語として全く意味をなさない文章である．これを読んで即座におかしいと思う人は相当英語についての語感のできた人である．一見正しいように見えるこのような作文をしないようにするには，日本人としては相当な英文読書（小説など）をしなければなるまい．

IGC の見学旅行などで使われることがあるかもしれないが，WC はもともと土をかぶせる earth closet に対して水で流す water closet から来たもので，決して単純に便所の意味ではなかった．現在WCは英語圏では死語になっており，gents，ladies，（以上は必ず複数形），toilet，public convenience などが使われている．

先日オーストラリア人のユーモア作家の TV 番組を見ていたら，「I beg your pardon」とは「若い人は知らないかもしれないが，電車の中で誰かに足を踏まれたときにいう言葉です」などと言っていた（これはもちろん冗談）．確かに「I beg your pardon」などと言う人はこの頃ほとんどいなくなって来た．言葉は生き物でどんどん変化するので，追付いて行くのはなかなか大変である．しかし一方われわれ外国人としては，余りに先端的な用法は避けた方がよいであろう．日本のテレビ英会話などの中には余りにくだけ過ぎて，やたらに俗語などを取入れたものがある．また，英語には男女別や階級差がほとんどないと信じ込んでしまっている人がいるが，決してそんなことはない．日本人でそれを知らずに，変な英語を習って来てしゃべっているのはけっこう多い．日本は今英会話ブームであるが，資格も経験もない無教養な英語国人を，英語がしゃべれるというだけで英語教師として採用している例を見聞することがあまりに多い．私の個人的経験でも，自分の英語論文の添削をいろいろな人に依頼してみて，文章の上手下手の違いに驚いた経験を持っている．考えてみれば日本人の日本語にも上手下手はあるし，教養のあるなしもあるのだから当然のことであるが，英語になるとそのへんの判断が難しい．ヒッピー英語や学生英語をしゃべったり，PTO（これも実は和製英語）をわきまえない俗語などを使ってしまわないためには，かなり注意しなければなるまい．

お座り下さいという時に日本人はよく「Sit down」などという．これでは，言い方によってはまるで犬にお座りと命令しているようである．Please をつけた方が良いであろう．命令形は日常会話では使わない方が安全ではないかと思われる．日本人にはあまり Please をつけ

日本人の非英語的英語の実例

日本に来たある学者を自宅に招待した大学教授が「何もありませんが隣の部屋で食事をどうぞ」というつもりで，Please eat next room, but there is nothing といったという話がある．

東京のあるホテルの表示．You are invited to take advantage of the chambermaids.

レストランで空いている席に座ってもいいか聞くのに，May I shit here？ といってしまった人がいた．

俗語英語の勉強し過ぎではなかろうかと思われる．

たり Thank you を言う習慣がないが，そのため arrogant とみられて損をしたり，いらざる誤解を招いている例があるのは残念である．

ニュージーランドのパブで，日本人の船員がいくら「ヘイ，ヘイ」と声をかけてもバーテンが全く向こうを向いたきりなので，「ヘイ，プリーズ」といったとたんにサービスしてくれたのを見たことがある．

口頭発表について

発音や英文が立派であったとしても，口頭発表に当って，日本人地質研究者（中国やソ連からの発表についても同じ傾向がある）に特徴的な欠陥があり，それを乗越えなければ外国人に理解してもらえないだろう．それは，「口頭発表と論文とは全く異なるものである」ことを理解すべきであるということに尽きる．ランディス氏始めオタゴ大学の同僚は異口同音にこのことを強調している．

具体的にいうと，スライドや OHP にあまりに多くの余計な情報を詰込み過ぎるなということである．限られた時間内に必要なのは，結論とそれを支持する本当にエッセンシャルなデータだけで，それも単純化した図表などで示すべきである．例えば本論文ならいざ知らず位置図に緯度経度などは必要ない．主題に関係のない地層などをハッチで区別する必要はない．聴衆にスライドなどの内容を読取るのに必要な十分な時間を与えるスピードで発表すべきである．ただでさえ下手な英語の上に，過剰な情報を伝えようとする（つまり生のデータが多く，しかも発表が速すぎる）のでは，聞いている方はたまらない．これは何も英語での発表に限ったことではないし，既にいろいろなところでいい古されたことであるが，特に日本人に目立つ特徴的欠陥であるので是非日本人地質研究者に伝えて欲しいとランディス氏他からの忠告である．

日本語の数字の読み方が4桁区切りであるのに対して，英語（SI 単位系もそうだが）では3桁区切りになっている．そのため地質年代などの数字を間違えて混乱を招いているのはあまりにしばしば見聞することである．これは，特にディスカッションの時などに著しい．私達としては普段から例えば「13百万年」または「13ミリオン年」などというようにして3桁区切りに慣れておいた方がよいのではないかと思われる．これは英語の慣用に盲従するというのではなく，最も合理的統一的に構築された SI 単位系に慣れるという意味で重要であろうと私は考えている．

よく注意していると英語国人でも三人称単数の動詞につける s などは，会話ではしばしば間違えて付けたり落したりしている．英語国民でも「You was……」などという人もいないわけではない．また同じ英語といってもスコットランド英語やアメリカ南部英語などは私達がふだん聞慣れている英語とは全く違っている．さらにドイツ英語とかインド英語とかもまた違っている．私達としてはこの文章に記したような事項には注意するとしても，あまり文法上の細部にこだわる必要はなく，胸を張ってジャパングリッシュをしゃべろうではないか．

慣用句や慣用表現に注意

Quite a few は少しではなくたくさんという意味．For good はよいことのためではなく永久という意味．Shoe string budget などといっても靴紐を買う予算のことではなく，ほんの僅かの予算ということ．Different という意味で Different kettle of fish などといわれても，突然ヤカンや魚がでたと驚いてはいけない．全然違うということの別の言い方に過ぎない．あまり使われない言葉だが岩枝の単数は Apophysis で複数は Apophyses である．語尾の発音は単数ではシス，複数ではシーズになる．Analysis は単数であり，複数は Analyses．Plateau の複数形は二つあり，Plateaus か Plateaux（どちらでもよい）．Bush-clad island をブッシュクラド島と固有名詞のように解釈しているのを見たことがあるが，これはやぶの生えた島ということである（clad は clothe の過去分詞）．Thrust は現在，過去，過去分詞とも同形であることに注意．

御存知ですか

「マンガン」という元素名は使用中止に決定

アメリカはじめ英語国での性差別反対の声の高まりにつれて，差別を連想させる用語は次第に使用されなくなって来ている．議長を Chairman ではなく Chairperson と呼ぶのは今や普通のことになった．その動きが進んでこのほど IUPAC（国際純正および応用化学非連合，International Union of Pure and Antisexist Chemistry）の最近の決定により，「マンガン，Manganese」という元素名は不適当ということになり「パーソンガン，Personganese」に変更された．ただし化学記号 Mn はそのままである．（USO）

KAWACHI Yosuke(1990): Usage of English among Japanese geologists—An advice—.

<受付：1990年5月2日>